池田自然史博物館

◆ 春告鳥 ◆



早春2月から3月にかけて、野山では「春告鳥（はるつげどり）」という別名をもつ鳥、ウグイス（鶯）が独特の美声で囀り始めます。この鳥は、古来より和歌や随筆などにも数多く詠み綴られており、四季を愛でる日本人にとって季節を感じさせるので、野鳥の中では最も馴染みがあるのではないでしょうか。しかしながら、「♪ホーホケキョ♪」の声に聞き覚えはあっても、その姿を見たことがあるという人は意外に少ないと思います。



下の写真のみメジロ
花札に描かれているのは
どうもメジロのようだ

花札の二月の札「梅に鶯」は、ウメの枝にとまるウグイスを描いていますが、背中は緑、腹部は黄色い羽の、まさにメジロそのものの配色です。この「梅に鶯」からウグイスの姿をイメージされている方も多いと思いますが、本当のウグイスは、全身が薄こげ茶色の羽の地味な鳥です。ウグイスは、主に藪や茂みの中で餌となる虫を探しながら飛び回っており、なかなか茂みの外へ姿を現さないので、鳴き声で存在を知ることができても、その姿を見ることは非常に困難です。





そんな見付けにくいウグイスですが、たまに自分の存在を周囲に誇示するかのように、梢近くや枝の先などに位置どって、空に向かってまさに叫ぶように囀ることがあります。そんな姿に出逢えたあなたは非常にラッキーです。





河川敷に樹林や藪、茂みの残された場所は植物たちが虫を呼び、さらに虫たちが野鳥を招きます。そんな多様な自然あふれる場所で、野鳥の美声と姿をじっくりと楽しんでください。ちなみにウグイスはその声の美しさから、オオルリ、コマドリとともに「日本三鳴鳥」と称されています。

環境省　環境カウンセラー
NPO法人　nature works

池田　哲哉

来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



私が造っている細流付近に、セイヨウカラシナが繁茂。春～夏に背が高くなり、作業スタッフが見えない。川遊びのこどもも危険である。というわけで2年前から駆除を開始。徐々に勢力は押さえられた。だが、しかし！　そのニッチを見つけ、別の植物が。鮮やかな黄色のテカテカ光る花。写真をフェイスブックに掲載すると、植物の専門家から「リュウキンカ」であると告げられ、きれいな花にダマされると猛烈な勢いで被い尽くされてしまうと警告された。ヒメリュウキンカであれば、環境省の侵略的外来種。オオキンケイギク同様、根ごと抜かないと駆除できないらしい。外来植物との戦いはいつまで続くのだろうか。（編集長・石山郁慧）

川と人　人と人を結ぶ
河川レンジャー 淀川管内
VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/　の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然画報

2016年3月号　No.18

淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル

YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



遥かなるマリアナ海嶺からの来訪者

ニホンウナギ　*Anguilla japonica*

日本人には馴染みの深い美味と滋養のシンボル、ニホンウナギ。淀川でも春頃から、シラスウナギ（若魚）が遡上してきます。運動能力が高く、堰や激しい流れも平然と乗り越える、まさにスタミナの塊です。近年、ニホンウナギの漁獲量が激減し、環境省のレッドリストでは「絶滅危惧IB類」とされ、「土用の丑が幻の日になるのでは？」と危ぶまれています。海から遡上して川で充分に育つと、また大海へと戻る習性があります。長らく、その正確な産卵場所は不明でしたが、近年にマリアナ諸島西側沖のマリアナ海嶺付近が産卵場所だと突き止められました。淀川流域でごく普通に生活しているニホンウナギ。実は遥か遠くの深海からの来訪者なのです。（画 / 新瀬幾恵）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

under the water

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

ヤリタナゴ
Tanakia lanceolata

コイ目コイ科アブラボテ属に分類され、日本産のタナゴ類のなかでは、最も分布域が広い種です。国内では本州、四国、九州にみられ、国外では朝鮮半島西部も知られています。体長は最大で13cm、体色は銀白色。体高は低く、種小名の *lanceolata* は槍の穂先のようなという意味であることからも、槍を連想させるスマートな体形です。





婚姻色のオスは宝石のような姿



繁殖期は地域により異なりますが、早春から夏期までと比較的長く、淡水産の二枚貝（マツカサガイ、カタハガイなど）に産卵し、卵から仔魚期の間を、二枚貝により守られて育ちます。流れが緩やかな河川、湖、池沼、用水路などに生息していますが、近年、生息地の破壊や二枚貝類の減少、外来魚の影響などで生息数は急激に減少しました。2007年には環境省レッドリストの準絶滅危惧に記載されています。食性は雑食性で、小型水生昆虫や岩などについた付着藻類等を食べます。繁殖期のオスは、胸部が鮮やかなオレンジ色～朱紅色に、背鰭の前縁と尻鰭下縁、産地により尾鰭中央後端部分にもオレンジ色が発色し、非常に美しく観賞用になります。産地によっては、銀鱗や透明鱗のものなど変異個体が比較的よくみられるのも特徴のひとつです。

花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館　主任学芸員
高田 みちよ

干潟のシギチ

水際で小動物を食べるシギ類、チドリ類を、鳥の研究者はまとめて「シギチ」と呼びます。この仲間の多くは長距離の渡りをすることで知られています。例えば、オオソリハシシギの場合、繁殖はアラスカ、越冬はニュージーランドやオーストラリア東部で、毎年太平洋を端から端まで移動します。発信器をつけて人工衛星で追跡した調査では、一気に1万kmもノンストップで飛ぶ過酷な渡りをすることがわかりました。長距離を移動し、中継地でしばらく餌を補給し、また一気に渡ります。移動には、渡り前にたくわえた脂肪や内臓のたんぱく質までも使用するため、中継地ではまず胃腸に重点的に栄養を割り振り、栄養の吸収ができるようにし、そして次の渡りの時には邪魔な胃腸を小さくてから飛び立つんだそうです。鳥って、すごいですね。

このように太平洋を往復する鳥たちにとって、中継地点である日本、とくに淀川のような大河川の河口干潟は重要な餌の補給地です。4月～6月は北上する途中、8月～10月は南下する途中にシギチが干潟にやってきます。海老江地区の干潟はシギチの観察にはもってこいです。この春は世界を股にかけたシギチを海老江で見学してはいかがでしょうか。



オオソリハシシギ

海老江の干潟



ハマシギ
（写真提供/池田哲哉）

ちなみに、このようなシギチの保護を図るため、「東アジア・オーストラリアシギ・チドリ類重要生息地ネットワーク」「アジア太平洋地域渡り性水鳥保全委員会」「ラムサール条約」など国際協定や条約があります。

the waterside

the sky & land

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省　環境カウンセラー　川島 大助

アミカのなかま

今年は暖冬でしたが、川の水はまだまだ冷たいですね。そんな水の中を覗いてみると、大きく成長した水生昆虫の幼虫をたくさん見ることができます。今の季節は、多くの水生昆虫の幼虫たちにとっても、水中生活を終える卒業シーズンです。卒業後は成虫となり、陸上で羽ばたきます！

今回ご紹介させていただく、アミカ（ハエ目アミカ科）も、春～初夏に幼虫から成虫へ羽化する水生昆虫です。「網蚊」と漢字で書きますが、成虫は刺すことはありません。幼虫は体長7～10mm、清冽な渓流域の早瀬の礫や岩盤の表面に生息しています。第1～6腹節の中央部にそれぞれ吸盤があり、強い水流でも剥がされることなく、しっかりと固着し、礫の表面の微細藻類を捕食して成長します。また、本種は水質指標生物でもあり、アミカは最もきれいな水域のスコア値10とされています。なお、スコア値は1～10の10段階で、10ほど清冽な水域の指標になります。



成虫は右のイラストのような姿をしている





（写真/上）石に張り付いた幼虫
（写真/右）淀川の源流部

淀川では上流域（滋賀県高時川等）へ行かないと、なかなか見ることができませんが、支流（安威川、芥川等）や琵琶湖流入河川など、郊外の渓流域にも生息しています。吸盤でしっかりと石に張り付くアミカは、タモ網でガサガサした程度では、容易に採集されません。大きめの石を取り上げて、石の表面を観察してみると、淀川水系で最もきれいな水質の指標生物とされるアミカを見つけることができますよ！

the worst 100

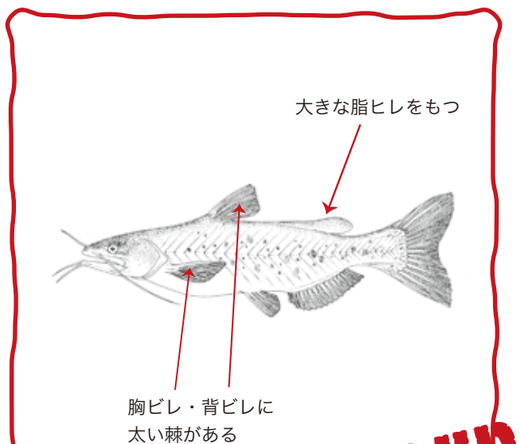
侵略的外来生物

淀川ワースト100

イクタルルス科 チャネルキャットフィッシュ
Ictalurus punctatus



淀川管内河川レンジャー　石山 郁慧



原産国は北アメリカ。ナマズの仲間で、繁殖期は春～夏。小型魚類やスジエビなどを補食するため、在来種に大きな影響を与える。

日本では霞ヶ浦で養殖されていたことから関東で多く見られたが、この数年で中部地方や淀川水系にも侵入。淀川本川だけでなく、木津川でも発見されている。淡水魚なので海を渡って侵入した訳ではない。人間が移動させたのだ。

2012年、私の活動で淀川大堰の魚道を取材したが、その際に魚道横に干涸びた本種が落ちていた。鳥が落としたのかもしれないが、本当に淀川にいるんだと思うと少し怖くなった。肉は結構美味と聞いているので、次の機会には食べてみようと思う。



（写真/上）
若魚には小さな黒斑がある
（写真/下）
淀川大堰に落ちていた個体

